

オンラインツールを活用した学芸員養成課程における授業実践

九州保健福祉大学

山内 利秋

はじめに

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大が、令和 2 年度以降の全国の大学の授業運営に大きな影響を与えている。繰り返される授業の休講と再開、感染防止対策の徹底や対面授業への不安、そして何よりもノウハウが蓄積されていなかったオンライン/リモート授業を否応なく実施しなければならなくなった事は、学生のみならず教職員にとって難しい課題であった。

一方、これを新たな授業改善への画期と捉えるのも可能なのかもしれない。確かにオンライン授業では対面と同じコミュニケーションは難しく、個々の科目で受講生の反応をいかに確認し、一方通行で情報を流すだけにならないようにするかに気を配るのは容易ではない。双方向性にこだわるあまり、教室という教員との同一空間には所在していない受講生の受講環境 (例えば自室等) を突然公開するように要求する訳にはいかないし、ライブ授業で顔を見せあっただけでは教員も学生もストレスが蓄積してしまう。しかしながら、こうした問題は我々がオンライン授業に習熟していなかったからこそ発生した問題であって、ある程度慣れてくるとこの状況をうまくこなすノウハウも出てくる。周辺を色々見渡してみるとすでに色々なツールも存在しており、これを上手く活用すれば、実習・演習のような双方向なコミュニケーションや身体的動作を伴う授業にも応用可能ではないだろうか。シンプルだが、そうした所から学芸員養成課程科目へのオンラインツールの活用を試みてみた。

学内実習とオンライン授業

発表者の所属する九州保健福祉大学は人口 12 万人弱の宮崎県延岡市にあり、大都市圏のマンモス校のように多数の学生が在籍する訳ではない。だからと言って学内サーバに余裕があるという事でもなく、学内 CMS(LMS) への授業コンテンツの蓄積は極力避けなければならなかった。従ってオンライン授業のうちオンデマンド授業は殆ど実施しておらず、ライブ授業が普通である。元々大学のメールアドレスを Gmail で管理している事もあって、教職員・学生アカウントからの利便性を考慮し、授業では現在の所 googlemeet 等の google 系のアプリケーションを使用している (オンデマンドが必要な場合は youtube 非公開 URL で管理している)。

学芸員養成課程での実習・演習を伴う科目としては「博物館学実習」があり、また、「博物館教育論」・「博物館資料保存論」でもワークショップ・実習形式の授業を部分的に取り入れている。このうち感染拡大に伴ってオンラインで授業を行ったのは前 2 者であるが、ここでは主に博物館学実習のうち、学内実習での取組みを紹介したい。

本学での博物館学実習のうち学内実習は PBL 形式で行っており、例年地域社会の課題解決をテーマとした企画展示を実施している。熊本地震の発生した平成 28 年度以降は災害を主題とした企画展示を開催していて、令和 2 年度は大学の所在する宮崎県で大規模な被害をもたらした平成 17 年台風 14 号の発生から 15 年目にあたるという事もあったので、大規模水害の記憶継承と次の災害への備えをテーマとした企画を検討していた。

しかしながら、授業は例年より 1 か月遅れた 5 月からオンラインでのスタートとなったので、すでに公開していたシラバスを組み直して未経験であった遠隔での授業に適した内容に変更する必要があった。だが、なるべくならば学修効果の高い従来のシラバスに近い内容で授業を進めたいと考えて、様々な方法を模索していた。こうした中でその存在を知ったのがオンラインホワイトボードであった。これは UX デザイン等で活用されており、ブレインストーミング等の合意形成をすすめるワークショップを実施するのに極めて適したツールである。

オンライン授業では web 会議システムで音声のみを接続し、受講生にはブラウザでこのオンラインホワイトボードを操作してもらうという方法を行った所、「模造紙に付箋を貼る」対面授業でのスタイルとほぼ同じ、学生間での議論が盛んに行われるブレインストーミングが可能となった。この際、オンラインホワイトボードには多機能の

"miro"(<https://www.miro.com/>)を使用する事を検討したが、英語表記でもありいきなりは難しいのではないかと考え、最初はシンプルな仕様の"google Jamboard"(google アプリ)で慣れてもらってから"miro"の方へ移行するようにした。

だがそうした配慮はよそに、受講生は教員が危惧していたように英文の使い勝手等はほとんど気にする事はなく、早い時間で miro を使いこなしていたのが印象的であった。これは過去、何度か対面でのプレストを授業で行っていた経験が活かせたと考えている。

展示会場デザインまでをこの"miro"で行い、実際の展示作業は会場をイメージしたスタディモデル(模型)の制作を行う等の工夫を取り入れた。このスタディモデルは標準的な建築模型のサイズでもある 1/50 スケールで製作し、履修者個人が担当した展示ゾーン(ブース)各所を組み合わせると一つの企画展示が完成するというものである。例年展示に利用している会場では制約があって難しい事も、今年度は模型ならではの可能な表現が見受けられた。完成したスタディモデルについては、学内実習期間中には展示を行う事が難しかったので、各人が映像アーカイブを作成し、youtube 非公開 URL でアップしてもらって講評会を行った。

学修評価について

受講生間のピア評価・各人の自己評価について検討してみる。この科目でのピア評価は、企画を推進してきて<何ができたか>・<より以上に何ができるか>を受講生それぞれが書き出し、皆で評価するという方法を採用している。<何ができたか>では「模型を作れるようになった」・「身近にある道具や材料をいかに模型に反映させることができるか考えられるようになった」「展示のおもしろさや大変さを知ることができた」といった技術や知識の獲得に関わる自負が、<より以上に何ができるか>では「全体の統一感を出す」・「展示物などの実物を実際に見たらもっといい物が作れる」といったような企画の展開に踏み込んだ受講生の創造力・構成力の向上や展示に対する理解の向上からくる目標をも垣間見られる記述が確認できた。これらの記述は例年の学内実習でのピア評価と差はなかった一方で、今年度は「模型ではなく実際にやったらもっと見る人に伝えられそう」・「実際に展示しているんな人に見てほしい」という今年度独特な感想も見られた。

自己評価については平成 27 年度以来経産省の「社会人基礎力調査」を活用しており、少し古くなったものの継続的な指標として令和 2 年度についてもこの評価指標を活用した。15 週の期間中 3 回程この調査を行い、個人個人の相対的な評価を確認した所、こちらも授業開始初段階から最終段階にかけて評価が向上する傾向が各人から確認出来、例年と同様に授業後半になるにつれ自己評価が高くなっていく傾向にあった。

可能性を考える

オンライン/リモートによる授業を複数の科目で担当してみて、対面授業に比べてはるかに手間がかかる事を痛感した。授業に双方向のコミュニケーションを求めるのならば、対面授業の方が確認しやすいのだろうと今更ながら考える。しかしながらオンライン授業にはこれまでにない特性がある点も理解している。

例えば学会・研究会等がリモート化した事による恩恵は地方に住んでいるとよく理解出来るのだが、こうした利点を授業でも展開出来ないだろうか。コストの問題から難しかった館園からのライブ、大学間での連携した演習等の可能性等を検討してみたい。